

親水性を考慮した御笠川の空間設計

九州産業大学 学生員○ 西田 哲也
九州産業大学 正 員 山下 三平

九州産業大学 属 文雄
九州産業大学 古川 優治

1. はじめに

前報¹⁾で著者らは、御笠川の沿川住民が河川環境を利用する目的と頻度を観察し、御笠川中流域を中心に修景案を提示した。

本稿では、太宰府市が位置する御笠川上流域を中心に、前報の観察結果と、新たに行ったこの区間の河川形態の測量結果をもとに、親水性を考慮して御笠川の空間デザインを試みたので報告する。

2. 方法

前報では、御笠川の河口から上流までを23の区間(区間総延長19.32km)に分類し、平日と休日に分け午前6時から午後7時までの間、河川利用者の目的と頻度を観察した。その結果、御笠川中流域では、自然が多く残されているため、多様な目的で利用されているが河川周辺の通行に難があることが明らかになった。そこで前報では、対象の地域に遊歩道を設ける修景を試みた。

本報では、人口密度の高い太宰府市内を貫流する御笠川上流域に目を向け、人々にとって望ましい河川空間を目指し設計を行った。その際、連歌屋橋から朱雀大橋まで(図-1参照)の地域の河川とその周囲の平板測量を行い、実現の可能性を検討した。本報ではこのうち、区間19と区間21の結果を示す。

3. 御笠川の空間設計

まず、対象の区間の目的別利用者数の割合グラフで示すと、図-2のようになる。この区間では、通行や散歩、ジョギングなどの移動型の利用者が見られるのに対して、水遊びや生物採集などの直接水に関

わるような滞在型の利用者が見られない。これは、この区間のほとんどには遊歩道が整備されているが、そこから水域へ移動する手段がないことが理由として考えられる。

以上の点を考慮し、設計したものが図-3である。このように遊歩道から階段を下ろすことで、水域での利用者が現れ、50m前後の間隔でこのような階段を設けると、さらに利用が増えると考えられる。

また、区間19ならびに21を含む連歌屋橋から朱雀大橋の間では、年に2回、河川の清掃活動が行われているにもかかわらず、河川へ下りる階段がなく、清掃の際にはハシゴを使用して水際を下りるといのが現状である。

一方、区間19では、左岸は車道沿いの歩道、右岸は遊歩道があるが、1日(日曜日)の利用者は移動型が1.83人/kmとごく少数である。また、滞在型は35.78人/kmでありこのうち「釣り」が34.86人/kmとほとんどをしめる。(ただし、これは朱雀大橋より下流側の直接的改修の行われていない部分に限られる。)この区間は、河川の両岸が高い護岸(4~5m)に挟まれているためにほとんどの部分が閉鎖的であり、また、人が水辺に近づくには難があるためと考えられる。

そこで、図-4のように、階段を設けることで水辺へ近づくことが可能になる。遊歩道がある右岸側に階段があるのが理想だが、左岸側の方が階段の幅をとることでき、より安全である。また、両方の階段の側には橋があり、対岸の遊歩道からもすぐに利用できる。

高低差があるため、階段の勾配をなるべく小さく

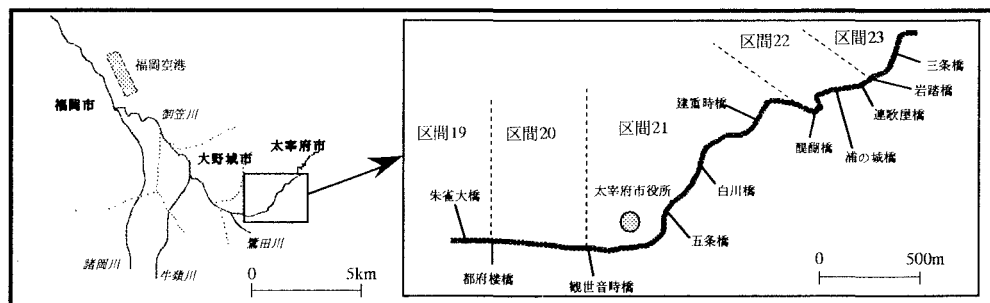


図-1 設計区間の概要

することも必要だが、図-4のように階段の途中に踊り場を設けることで、安全に感じられ、また、変化があることで景観面においても良い。

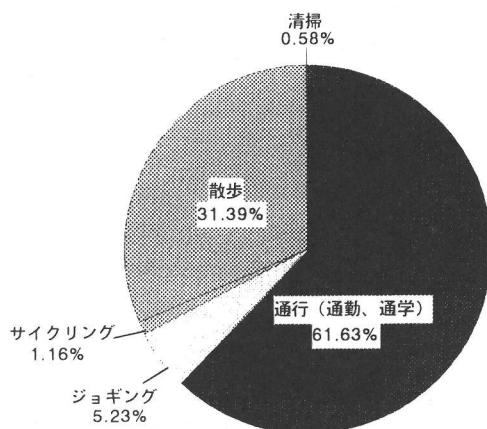


図-2 区間21の目的別人数の割合(日曜日)

水際においての修景は、高水時や上流域であることを考慮すると、自然をできるだけ残し、階段付近に芝を植える程度で十分と考える。

4. おわりに

本研究では、昨年度の河川利用者の観察結果をもとに、人々にとって望ましい河川空間を形成するために、御笠川上流域を対象として平板測量を行い、実現可能な範囲で空間設計を行った。

御笠川には、陸域と水域との連係が根本的に不足しているといえるので、これをまず補う必要がある。そうすれば、多様な目的での河川空間の利用が可能になり、利用者が増加する。また、河川清掃の際にも便利が良くなり、環境面でも効果が現れる。そうして市民の関心が高まったのちに、一の坂川(山口県)のような、自然に満ちた河川空間を創造するという段階を踏むのが理想的であると考え。

参考文献：1) 山下三平、宮崎弘樹ほか：御笠川における重要視点場の同定とそれに基づく修景案の試み、土木学会西武支部研究発表会講演概要集(1996.3) IV -48 p.844

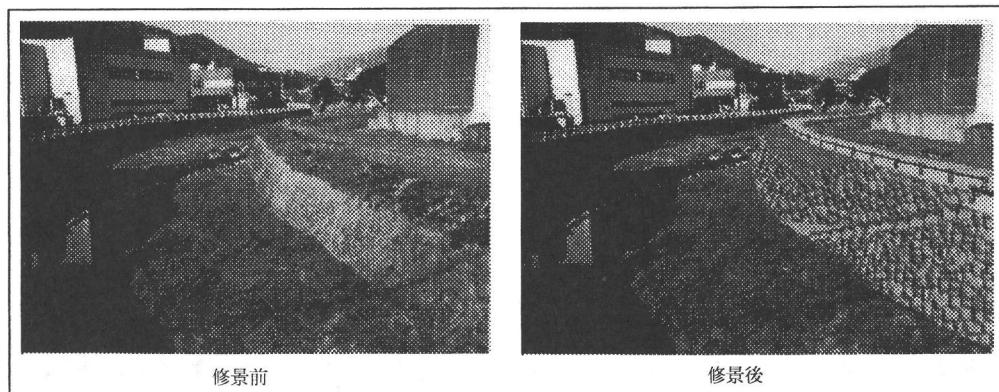


図-3 区間21での設計案(視点場：五条橋、方向：上流)

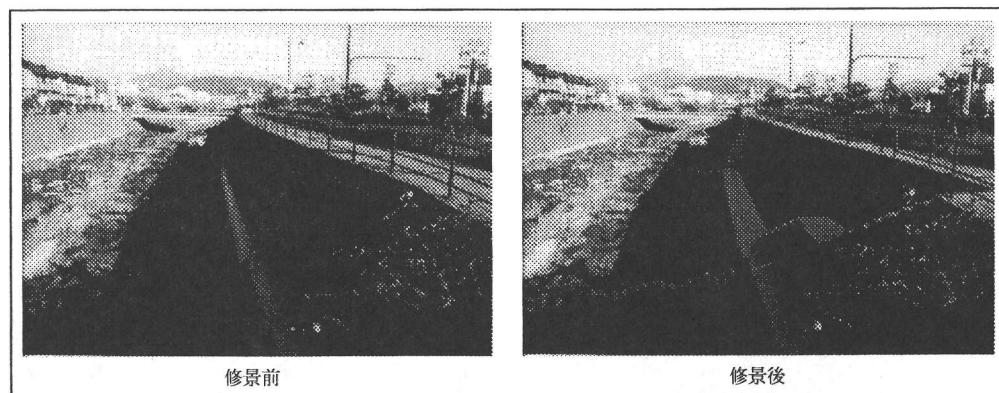


図-4 区間19での設計案(視点場：朱雀大橋、方向：上流)